

明治の『ロミオとジュリエット』

——シェイクスピアと日本の英語教育——

Romeo and Juliet during the Meiji Period: Shakespeare and English Education in Japan

近 藤 弘 幸

要 旨

本論は、明治時代における「活字になった『ロミオとジュリエット』」について整理することで、以下の三点を明らかにする。①『ロミオとジュリエット』といえはバルコニー・シーンが有名であるが、明治の人々の心をとらえたのもこの場面だった。②それを踏まえて際立つ坪内逍遙の特異性。坪内は、自らの翻訳を刊行する前に雑誌で一部を先行公開しているが、あえて第四幕以降を選んでいる。その選択は、初期の『ロミオとジュリエット』受容があたかもバルコニー・シーンだけで事足りたことに対する、アンチテーゼのように思われる。③明治という新しい時代を迎えておよそ二〇年を境に、受容のモードに変化がみられる。この頃から「英文学研究」が制度化され、本格的な受容が始まる。さらに世紀をまたぐと、日本の観客のための『ロミオとジュリエット』が登場し、新しい教育制度のもとで学んだ人々による『ロミオとジュリエット』が出版されるようになる。

キーワード

翻案、翻訳、ラム、『シェイクスピア物語』、坪内逍遙

はじめに

本論の目的は、明治時代における「活字になった『ロミオとジュリエット』」——翻訳・翻案の新聞・雑誌への掲載や単行本としての出版、雑誌記事、上演台本や劇評など——について整理し、どのような人々がこの恋愛悲劇の初期の受容に携わったかを明らかにすることである。以下、年代順に記録に残る『ロミオとジュリエット』を並べ、その概要および関係者の略歴を記述する。

明治の『ロミオとジュリエット』一覧

一八六九年十一月十五日（明治二年一〇月二二日）

一八六九年十一月一九日付英字紙『ジャパン・タイムズ・オーヴァーランド・メール *The Japan Times' Overland Mail*』の「音楽と演劇 Music and the Drama」欄に、「月曜日にファニー・レイノー嬢 Miss Fanny Raynor と W・ベニー氏 Mr. W. Bennet による余興があった」という記事が掲載されている。当日のプログラムは、チャールズ・セルビー Charles Selby の笑劇『亀狩り *Hunting a Turtle*』、『ロミオとジュリエット』のバルコニー・シーン、ウィリアム・バーンス・ロウス William Barnes Rhodes による音楽悲劇のバーレスク『狂えるボンバステイーズ *Bombastes Furioso*』の三本立てで、「横浜素人劇団 Yokohama Amateur Corps Dramatique」による助演があった。^①

記事は、笑劇のあとで演じられたバルコニー・シーンは低調であったが、それでもシェイクスピアの美しさは損なわれなかったと述べている。記者によれば、シェイクスピアの美しさとは「きれいに摘まれ編まれた花束の美しさではなく、自然それ自体の惜しみない豊かさ no bouquet of flowers neatly cut and skilfully arranged, but rather it is the unstinted profusion of nature herself」である。記事はさらにシェイクスピア＝ベイコン説と云う「異端 heresy」に言及し、ベイコンが「ウィット、ユーモア、想像力、学識、哲学、詩的気質 wit, humour, imagination, learning, philosophy, and the poetic temperament」をふんだんに持っていたことを認めつつ、彼にはこのような場面は書けないとして、それを退けている⁽²⁾。

一八七九年（明治一二年）四月一〇日

この日、竹村正路なる旧幕臣が、『遊戯雑談 喜楽の友』という雑誌を創刊する⁽³⁾。この雑誌には、創刊号から「続物語」として「ロミオとジュリエットの話」が連載されており、その初回には、

英国ニ於テ有名ナル狂言作者（セイキスビール）氏ガ芝居ガ、リニ著述セル書物ノ中最面白キ話ヲ同国人（チャーレスラム）氏ガ通俗ノ文ニテ綴リタル珍書ヲ得ケレハ毎号訳文一條ヲ載セ江湖同好ノ諸友ニ示サント欲ス

との言葉が添えられている。この言葉が明らかにしているように、「ロミオとジュリエットの話」はラム版に基づいており、八回の連載で第五幕第三場のパリスの登場までを描いているが、雑誌の刊行停止とともに中絶している。

連載は無署名であるが、その作者は小栗貞雄だと推定される。⁽⁵⁾

一八八〇年（明治一三年）

この年刊行された『伊勢古事記日曜叢誌』という雑誌の第一七号において、『ロミオとジュリエット』が紹介されているらしいという未確認の情報を、柳田泉が書き留めている。⁽⁶⁾同雑誌が今後発見される可能性は極めて低く、この情報は未確認のままとなることであろう。

一八八四年（明治一七年）二月八日

この日、静岡の『函石日報』（『郵便報知新聞』系列紙）の「雑報」欄に、次のような告知が出ている。

英國有名ノ詩家シエーキスピアーノ著作ハ欧米各国ニ於テ俳優之ヲ劇場ニ演シ樂人之ヲ其曲ニ和ス曾テ聞ク英米ノ劇場ニ於テシエーキスピアーノ著作ヲ演スルトキハ觀客常ニ場ニ溢レ其興行時間ノ若キ短キモ四年乃至五年ニ至リ長キハ則チ十有余年ニ亘ルト又タ以テ其著作ノ巧妙秀逸ナルヲ知ルニ足ラン蓋シ其詩句ハ欧米人常ニ之ヲ古ノ詩家ミルトンノ詩句ト共ニ其口ニ膾炙シ賞讃嘆美至ラサル所ナシ頃日社友佐藤蔵太郎氏（矢野文雄君ノ纂訳補述セル經国美談ヲ筆記シタル人ナリ戲号ヲ菊亭香水ト云フ）ハシエーキスピアーノ著作ニ係ル小説某書ヲ訳述シテ之ヲ本社ニ投寄サレタリ依テ將サニ本日ヨリ続々之ヲ掲出シ以テ諸君ノ觀覽ニ供セントス⁽⁷⁾

シェイクスピアが、あたかもミルトンという古典的詩人に比すべき現代の人氣作家であるかのように紹介されていることが興味深い。この告知に続けて、訳者による「緒言」も掲載されている。

本編ノ原書ハ有名ナル英国ノ狂言作者シエーキスピア氏ガ著述セルモノニシテ書中ノ記事ハ能ク人事世道ノ情態ヲ悉シ読ム者ヲシテ忽チ喜怒哀樂ノ真情ヲ發起セシムニ足ルノミナラス深く措辞ノ巧婉ヲ考ヘ行文ノ流麗ヲ味フ時ハ更ニ一層ノ微妙曲折ノ間ニ存シテ実ニ言フ可ラサルノ深意ヲ含蓄セルモノ多キ事ヲ覺ユト雖モ奈何セン予ガ如キ浅学不才ノ筆モテハ到底之ヲ翻訳セント欲スルモ又其ガ十ノ一二ダモ写出ス能ハザルコトヲ加之文辞拙劣或ハ笑ヲ江湖博雅ノ士ニ招ンモ知ル可ラズト雖モ是等ハ固ト予ガ甘スル所ニシテ只小説ヲ好ムノ一癖ヨリ繁多ナル業務ノ余暇ヲ偷ミテ戯レニ之ヲ意訳シ聊カ世上同好ノ人ニ示サント欲スルモ亦彼ノ楚鷄ヲ籠ニシテ丹山ノ鳳ナリト自ラ欺キ他ニ誇ラントスルガ如キ業ニアラザレハ看官幸ニ諒焉明治甲申ノ初春東都二州橋畔客舍孤燈ノ下ニ識ス⁽⁸⁾

かくして翌九日から「在東京 菊亭香水」の署名で連載されたのが、『ロミオとジュリエット』の翻案「欧州奇聞花月情話」である。菊亭香水こと佐藤蔵太郎は、一八五五年（安政二年）に佐伯藩の下士の子として生まれ、明治の新開界で活躍した文筆家である。⁽⁹⁾

この連載は、バルコニー・シーンまでを描いたあと、二六日に「記者曰ク欧州奇聞花月情話ハ役者菊亭氏ガ病氣ニテ其ノ続稿ヲ起ス能ハズ依テ全快ノ日マデ一時中絶ス看官幸ニ之ヲ領セラレヨ」⁽¹⁰⁾との告知が出され、その後再開

することなく中絶している。柳田泉によれば、「これは、単なる表面的な口実で、実はほかに理由があったのである。それは、菊亭がこの『ロミオとジュリエット』を『函右日報』に訳載し始めたのを、報知社の主筆藤田鳴鶴（これも菊亭の同郷先輩）が見て、あの話は自分が後で「報知」に載せようとしているものだから、君の方を止めてくれないで困るといったので、菊亭も止むなく、中絶にしまったのだという」¹¹。

「緒言」の菊亭香水は、「欧州奇聞花月情話」がシェイクスピアの原文からの「意訳」であるかのような口ぶりであるが、実際にはラム版に基づくものであるのみならず、『喜楽の友』に連載された「ロミオとジュリエットの話」を下敷きにしたものであると思われる¹²。

一八八五年（明治一八年）四月七日

この日、『郵便報知新聞』の「叢話」欄で、無署名でラム版に基づく「落花の夕暮（ロミオ、ジュリエット）」の連載が開始される。初回の紙面には、当時連載中の『繫思談』の連載を中断し、「之れに代ゆるに先程まで掲け来りしセクスピアの筋書中最も巧妙なる小話を以てすべし」¹³との言葉が添えられている。ここで「先程まで掲け来りしセクスピアの筋書」という言葉が指しているのは、前年一二月一六日から大晦日まで全一二回にわたって九阜山史名義で連載された「花間の一夢」のことだろう。これはラム版「シンペリン」に基づくもので、連載開始にあたって、次のように述べられている。

余往キニ撒斯比亞ノ稗史ヲ抄録セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入り易キ小話ヲ訳出シ之ヲ春宵閑話ト題シテ

本紙中ニ掲ケ一ハ以テ泰西ノ稗史ニ存スル風味ヲ知ラシメ一ハ以テ余ガ文藻ヲ培養スルノ一助ニ供センコトヲ期シ三四種ヲ訳シ了レリ爾後故アリテ之ヲ紙上ニ載スルヲ廢シタレドモ既ニ其稿ヲ脱セル者若干種ヲ存セリ今ヤ本紙ヲ改革シ叢話ノ一欄ヲ置テ日々是等ノ文辞ヲ掲クルコトニ定メラレシニヨリ遊戲ニ属スル閑文字モ亦其必要ヲ報スルニ会ヘリ因テ更ラニ旧稿ヲ把リテ本欄ニ見参スルコトナレリ題名ハ余ノ私撰ニシテ原名ニアラズ読者之ヲ諒セヨ⁽¹⁴⁾

つまり、九臯山史という人物は、これ以前にもシェイクスピア物を「春宵閑話」の題で連載していることとなる。これは、翠嵐生名義で一八八三年（明治一六年）に同紙「漫言」欄に相次いで連載された「春宵夜話」（途中から「春宵閑話」）シリーズ——「^ゼThe winter's tale」^{ウイントルステール}（三月一五日から二八日まで、全一〇回）、「As you like it」（四月五日から五月一日まで、全一七回）、「The two gentlemen of Verona」（五月三日から二四日まで、全一二回）、「^{ハムレット}Hamlet prince of Denmark」^{プリンス オフ デンマーク}（六月二日から二一日まで、全一六回）——のことである。

『郵便報知新聞』では、「落花の夕暮」のあと、一八八五年（明治一八年）には九臯生（これは明らかに九臯山史と同一人物だろう）名義で、「栄枯の夢」と題された「マクベス」（七月一〇日から一八日まで、全七回）と「雨後の花」と題された「終わりよければすべてよし」（七月二日から八月一日まで、全一三回）が掲載されている。「落花の夕暮」そのものは無署名であるが、これも九臯生／九臯山史によるものと考えて間違いないだろう。

それでは九臯生／九臯山史＝翠嵐生とは何者なのか。それについては、柳田泉がすでに明確な答を出しており、ほかならぬ『函右日報』の「欧州奇聞花月情話」を連載中止に迫り込んだ藤田鳴鶴（本名・茂吉）である。⁽¹⁵⁾「あの話

は自分が後で「報知」に載せようとしているものだから、君の方を止めてくれなくては困る」と藤田が言っていたのは、この「落花の夕暮」のことだったのである。それぞれの事情で中絶した「ロミオとジュリエットの話」「欧州奇聞花月情話」とは異なり、「落花の夕暮」は無事完結する。こうして『ロミオとジュリエット』は、初めてその全貌が（ラム版に基づくという形とはいえ）日本に紹介されたのである。

一八八六年（明治一八年）一〇月

この年の八月、「明治時代から大正時代にかけて、大阪心斎橋筋を代表する出版社」であり、「出版の規模と質の高さにおいて「東の博文館、西の嵩山堂」と言われた」⁽¹⁶⁾青木嵩山堂が、『世界旅行万国名所図会』全七巻の刊行を開始する。社長の青木恒三郎は、「大阪の町医者で薬局経営の上田文斎の三男」に生まれ、「大阪の青木家に養子で入り、出版業「青木嵩山堂」を起こした」⁽¹⁷⁾。『万国名所図会』は、同社を代表する出版物のひとつで、社長みずから「一歩も歩行せずにして世界万国を遊歴し旅行日記の如きもの」⁽¹⁸⁾として編集した。

この『万国名所図会』の第二巻には「英吉利国之都」があるが、そこにシェイクスピアの名前は登場しない。興味深いことに、第三巻の「仏蘭西国之続／巴黎府之記」においてパリの劇場の様子が紹介されるなかで、「作者の中興名高きは、英国詩文学者なるセツクスピア氏となす」という記述があり、『ロミオとジュリエット』の翻案と⁽¹⁹⁾思われる作品の梗概が、「或友か實際を、目撃したる筆記をば、直写したるもの」として紹介されている。

設定は古代ローマに置き換えられ、モンタギュー家はボクレン家、キャピュレット家はカイドランク家となっている。舞台は、カイドランク家の家臣ゴータン（サムソン）とユーボック（グレゴリー）の挑発に、ボクレン家のモ

ース（ベンヴォーリオ）が応えるところから始まり、カイドランク夫妻とボクレン夫妻も駆けつけ、大騒動となる。そこへローマ王（エスカラス）が登場して両家を分け、「若他日復暴挙セバ、死罪以て償ふも、猶ほ免さるべし」と申し渡して去る。カイドランク家の人々も去り、舞台はボクレン夫妻とモースだけとなる。ボクレンは、姿を見せない息子チユン（ロミオ）についてモースに尋ねる。モースは、夜明け前の森でチユンを見かけたことを報告する。遠くからチユンが歩いてきたことに気づいたボクレンは、チユンの様子を探るようモースに命じ、妻とともに立ち去る。チユンの憂鬱が恋煩いであることに気づいていたモースは、「然らば他の花を、別園に探り以て之を遺却すべき也」と提言するが、チユンは「天下、恐らく余の意に適するの、花とてはなかるべし」と言つて去る。モースの「噫不解の者は夫れ恋情なるかな」という独白とともに「絃鼓一斉鳴り響き、観客拍手喝采の、声と共に幕下る」。

第二幕——「舞台の正面ハ、老樹鬱蒼淡烟の之を裏みつ缺月ハ、朦朧として濃雲の、方に之を吞む如し、左に一つの高樓あり、藤葛之に纏被せり、右の方には圯牆あり、薜蘿之を掩匿す」。「夜将さに三更ならんとき」、チユンが「雨衣を身に纏ひ笠を戴き而して、長劍帶徐徐然と、楼下の傍に出来る」。一方楼上にはひとりの女性が登場する——「年齢二八可なり、白衣白帶鬢髪は、雲の如く背後に垂れ、姿儀整齊螭首蛾眉、艷麗にして濃ならず、清ふして又淡ならず、涙眼愁を含の状、彼の海棠の露に泣、風情の如く傷し、」。サックラ（ジュリエット）である。サックラは、なにか独り言を言っているが、チユンの耳には聞こえない。独り言を終えたサックラは、楼下にチユンがいることに気づく。サックラは驚き、こう呼びかける——「郎君々々何所より、能く茲に來まふや、圯牆高く超へ難し、且つ郎君ハ妾が家の讐敵なれば、家臣若し一瞥すれば郎君は、生て再び邸外に、出で玉ふ事能ふまじ」。こうして、バルコニー・シーンが展開される。バルコニー・シーンは、かなり正確に再現されているが、二人がここで結婚を約

束することはなく、翌日の夜九時の再会を約束して別れる。残されたサックラは「別顔惆悵と、五躰も殆ど裂けんとし、一声泣飲転転して倒れたり、満場の観客一斉に拍手喝采地動く、帷幕下りて又上り、再び下つて燈滅す」。掲載されている梗概はここまでであるが、その記述が正確であるとするならば、このパリで上演された翻案は、ベンヴォーリオが好戦的であり、ロザラインが消去されている点で、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』とは異なっている。この梗概を読む限りでは、チュンとサックラは、幕開きの時点ですでに相思相愛であるという設定になっており、ふたりが出会う舞踏会もカットされている。なお、この梗概には三枚の挿絵が添えられており、一枚目が剣を振りかざして対峙するボクレンとカイドランク、二枚目がボクレン夫妻とモースの会話、三枚目がバルコニー・シーンとなっている⁽²¹⁾。

一八八六年（明治十九年）五月

「河島敬蔵訳／瀧本誠一校」の『沙比阿原著／露妙樹利戯曲 春情浮世の夢』が和歌山の耕文社から出版される。訳者の河島敬蔵は、一八五九年（安政六年）「微賤なる和歌山藩士の家に」生まれ、大阪での勉学を経て一八七五年（明治八年）上京、「立教学校の本校に入学し専ら英学と数学を」学ぶも、父の病気のため和歌山に帰り、「旧藩主徳川侯の投資金を以て和歌山青年を教育するために建設せる自修舎の教師と」なった。さらに一八八二年（明治十五年）、

大阪に出て立教大学の分校と同様なる英和学舎に教授することになった。在職中偶然学校の図書室に沙翁戯曲

全集を見出し、兼て沙翁戯曲は欧米に有名なることを耳にしてゐたから、ジュリアス・シーザーより読み初めたが、恰も暗中に物を探る如く苦心慘憺として僅かにこれを読み終りました⁽²³⁾。

その後河島は、『日本立憲政黨新聞』の依頼で『欧州戯曲ジュリアス・シーザルの劇』を一八八三年（明治一六年）二月二七日から四月一日まで全三四回にわたつて連載する。この翻訳は、当時同紙社員であつた小宮山桂介（号・天香）が手を加え、「鶯林学人／天香逸史」の共訳名義で『沙吉比亜戯曲 羅馬盛衰鑑』のタイトルで一八八六年（明治一九年）九月に大阪の駈々堂から出版された。河島は「この出版に関しては、何等關係なく、表題などは出版の際新聞社が勝手に改竄」したものであるが、彼自身は「この時 Shakespeare 研究に専念没頭して、ただ Shakespeare 劇を読破する事のみを考へてゐたから、新聞社の行為に対しては少しも意を留めなかつた」⁽²⁴⁾。

シーザーの劇は全部新聞紙上に掲載せられ、尋て私は家事のため郷里に帰り、教授の側らロミヨウ、ジュリエットを読み初めこれを訳出した。原稿は間違ひだらけであつたから、これを本箱の底に納め置、時機を待ち訂正して出版せんとしたるに、和歌山耕文社々主赤城友次郎氏これを試みに自己の印刷所出さんとし頻りに勧められたるを以て、同氏に原稿を托しました⁽²⁵⁾。

こうして出版されたのが、『春情浮世之夢』である。当時河島は「高野山の麓、紀の川の辺りに閑居し、有志の青年に英語を教へ、ハムレット・オセロ・夏の夜の夢其他沙翁の戯曲数十種を」読み終えた。その後、在留英国人の子

供たちの教育のために設立された横浜の「ヴェクトリア女皇記念学校」に招かれ、「数学・地理・歴史等を受持、総て英語で質問をなし英語で返答させる」授業を行った。その後、「立教大学の講師」を経て大阪に戻り、「桃山中学校及び天王寺中学校に英語を教へ」た。⁽²⁶⁾

一八八六年（明治十九年）五月

沢屋井上蘇吉なる人物が、Charles Lamb, *Tales from Shakespeare*, Tokyo: S. Sawaya を出版する。同書には、「リア王」（二一―八頁）、「マクベス」（二九―三一頁）、「アテネのタイモン」（三二―四六頁）、「ロミオとジュリエット」（四七―六六頁）、「ハムレット」（六七―八四頁）、「オセロウ」（八五―一〇〇頁）が収録されている。これは「本邦最初のラム姉弟の『シェイクスピア物語』の英語教科書」であり、一八八八年（明治二年）五月には敬業社から再版が出ている。⁽²⁷⁾ 井上蘇吉について詳細は分からないが、敬業社は彼が興した出版社であると思われる、同社の出版物の発行人には彼の名前が記されている。同社は、「中学校師範学校諸専門学校其他同程度ノ教科書及各種教員生徒諸君ノ参考書類ノ出版ヲ専業ト」する出版社であった。⁽²⁸⁾

本書の人気の裏付けとなるのが、一八九二年（明治二五年）一〇月に国文社から出版された『ラーム氏沙翁文粹註解』という書物である。これは、井上の *Tales from Shakespeare* の頁行にあわせて、その註釈のみを並べた解説書となっている。注釈者は岡村愛蔵とジェイムズ・H・ケルナー James H. Kellner。同書奥付によればケルナーは「清国天津寓」となっているが、詳細は不明。奥村は一八六五年（慶応元年）に鳥取県に生まれ、アメリカ留学を経て国民英学会の講師を長く務めた。⁽²⁹⁾

一八八七年（明治二〇年）一月

「英国シエクスピア氏著／依田百川閱並序／春煙小史訳／花月情史跋／文学士春の屋おぼろ序」のクレジットで、『仇結奇の赤繩あだむすびしぎ 西洋娘節用いろなわ』が誠之堂から出版される。依田百川、春の屋おぼろは、言うまでもなく依田学海、坪内逍遙。花月情史は、田口卯吉の経済雑誌社の記者などを務めたジャーナリストの植田栄で、「土佐の出、金もあり、相当教養もあつた人で、本書も実は植田氏の出資に依つて上梓せられたもの」だという。春煙小史こと木下新三郎は、一八八五年（明治一八年）に大学予備門を卒業するが、「大学は事情あつて中途退学、衆議院事務官をふり出しに」官僚としてのキャリアをスタートさせ、台湾総督秘書官を務めたのちに下野、台湾日々新聞社長を経て実業界に転身し「大いに活躍せられた」。本作は、「大体ラムを種本にしシエクスピヤの原文を参照しつゝ、自分の頭で改刪して」書かれた『ロミオとジュリエット』の翻案で、ロミオ／ジュリエットには籠女男／濡鸚越都の漢字が当てられている。⁽³⁰⁾

『西洋娘節用』というタイトルについて高市慶雄は、「曲山人「仮名文章娘節用」の転用である事は誤ないと思ふ」と述べている。

仮名文章娘節用三編九巻は、有名な元禄俚謠小三金五郎の情話を、曲山人が改作敷衍して一篇のローマンスに編んだもので、化政以後の所謂軟派世話物戯作中の白眉である。〔……〕小三と金五郎との恋愛関係を主題とし、事情あつて東西両京に別れ住まなくてはならない事となつたが、後再び邂逅して一時耽溺の三昧境に沈み、再度の義理に迫られて絶縁を余儀なくされる。すると小三はあらゆる前途の希望も打棄て、自刃して果てる

といふ筋である。江戸末期軟派には附きものの、廓の情景が出て來たり、相手方の金五郎は依然生存してゐたりするあたりは、「ロミオとジュリエット」と少しく趣を異にするが、一人の女性がどんな現実の障害にも打勝つて純情の恋に殉じ、終始節操を変へずして、遂に自刃する本筋に至つては、彼此符節を合した如く同一である。のみならず曲山人の文章と「西洋娘節用」の文章とが、両方共馬琴風の淨瑠璃句調で、頗る相似てゐる。⁽³¹⁾

木下は、この作品が「誤つて世の好評を得」⁽³²⁾たことを受けて、同年七月、『哀別奇遇 誠之鏡』（英国塞格斯比亜翁著／日本春烟小史訳）のタイトルで『ペリクリーズ』の翻案を刊行している。

一八八七年（明治二〇年） 一二月二三日

この日刊行された『日本之女学』第四号および翌年二月二〇日刊行の同誌第六号に、水鏡亭主人なる人物の手による「仇ゑにし」という作品が掲載されている。『日本之女学』は、その誌名の示すとおり、日本固有の「女学」を振興するために、この年八月二三日に創刊された。創刊号巻頭の「日本の女学発兌の趣旨」は、「西洋流の女学は最も美にして男女同権の教は善ならざるには非らざれども東西自ら国風を異にして或は我国の婦人に適せざるの憾なき能はず」、むしろ「我国婦人の義徳なる貞淑柔和質素の風を破り驕慢奢侈の弊を招きて未だ西洋女学の益を得ざるの前に於て早や既に我国固有の女徳を失ふに至る可し」⁽³³⁾と主張する。

故に我国の女学を振興して婦人の地位を高尚ならしめんと欲するものは我国固有の女徳を以て質と為し西洋技芸

の教を以て文と為し文質彬々たらしめんことを是れ務む可きなり貞淑よく良人に事へ柔和よく他に接し質素よく家を守り慈愛よく子女を教え兼ねて才芸に長し智識に富みて一世の時務に通ずるの婦人にして始めて吾人の母と為す可きなり始めて吾人の姉と為す可きなり⁽³⁴⁾

『近代婦人雑誌目次総覧』は、その背景について、

この雑誌が出されたのは明治二〇年であるが、その二年前の明治一八年文明開化の風潮の中で欧化主義的、開明的な初めての本格的婦人雑誌『女学雑誌』が出され、人々の注目をあびた。しかし明治二〇年代に入ると国家主義的風潮が強まっていく中で、その欧化主義への批判も出てきて、女子教育は良妻賢母主義的傾向をとりはじめた。従って婦人雑誌でもこの傾向は強まってゆき『日本之女学』はまさにその先鞭をつけるものであった。⁽³⁵⁾

と説明している。

「仇怨にし」であるが、一読して明らかにラム版に基づく『ロミオとジュリエット』である。その第一回は、ロメオがカプレットの宴会に潜入しているのをタイバルトが見とがめ、「悪きモンテーク思ひ知れ今夜の無礼此儘に報はしておくべきことかやと独り心に誓ひけり⁽³⁶⁾」というところで終わっている。第二回は、出会ったロメオとジュリエットの会話を次のように訳している。「おん身の白き腕こそ清き神机に似たるかし我は賤しき巡礼なり若しやおん身の

腕に触れけがすことのありもせば吻礼^{ふんれい}なして謝罪^{しやざい}せん許し給へ」「喃巡礼^{のふじゆんれい}よ、おん身^みが信心^{しんじん}なさすまは巡礼^{じゆんれい}にはいと過たり聖徒^{ひじり}の御手^{おんて}はふる、もよし吸^すはゝ悪^{あし}しかり心得^{こころえ}給へ」「聖徒^{ひじり}は唇^{くちびる}をもちたまはずや又巡礼^{じゆんれい}には口なきや」「さればなり共に唇あるなれど、こは祈願^{ねがひ}の用にして接吻^{せつふん}なすがためならず」「されば聖徒巡礼^{ひじりじゆんれい}が、願言^{ねがひごとき}聞きてたべ若しも許し給はずば我は憂愁^{うれい}に沈^{しず}みつ、心は千々にみたれなん」。(37)ラム版に基づくので、もちろんここでふたりがキスを交わすことはない。それぞれに互いが旧敵の子同士であることを知り、ロメオは仲間と別れてカプレットの屋敷に舞い戻り、バルコニー・シーンが始まるが、ジュリエットの「如何にして此所へは来ませしぞ」という問いにロメオが「恋^{こひ}こう我身^{わがみ}の案内^{しるべ}なれ」と答え、「ジュリエットは我が思^{おも}ふ心^{こころ}をうたてくも恋^{こひ}しき人に悟^{さと}られていと愧^{はず}かしきことなりと紅葉^{もみぢ}を顔^{かほ}に散^ちらせども夜は暗くしてロメオは之^{これ}を見るよしもなかりき」。(38)という言葉で結ばれている。

訳者の水鏡亭主人については、よくわからない。また、こののち「仇糸にし」の続きが『日本之女学』に掲載されることもなかった。この先の物語の展開が、『日本之女学』の理想とするところとは、必ずしも一致しないこともその理由のひとつだったのかもしれない。なお、同誌第一一号には、「シエクスピーヤは何人ぞや」という無署名記事があり、シエクスピーア＝ベイコン説が紹介されている。(39)

一八八九年（明治二二年）六月一日

この日、『大阪朝日新聞』に「編者半痴居士申す、明日よりハ悪因縁^{あくいんねん}といふ、当編^{わかたけ}とハ反对^{はんたい}で、時代物^{じだいのもの}の、ソウして、花やかな、中に哀^{あは}れな意味^{いみ}のある、面白^{おもしろ}い——但手前味噌^{たてまへみそ}——演劇風^{しやぶがふう}の小説^{せうせつ}を御覧^{ごらん}に入れますから、其お心算^{そのつもり}で……」(40)という告知が掲載される。翌日から始まった『悪因縁』は、七月九日の連載第二〇回、それが「セキスピ

ヤ氏院しみんほんろう本中もつとにて、尤も傑作けつさくの名あるロミヨー、ジュリーずきの劇はんあんを翻案（42）せるもの（41）であることを明かして中絶する。半痴居士とは、『何桜彼桜銭世中』の作者として有名な宇田川文海である。

宇田川文海にはシェイクスピアを読めるだけの語学力があったとは思われず、彼の翻案は、誰かほかの人物による翻訳に依拠したものだと考えられている。坪内逍遙は、「宇田川氏の翻案の如きも、原訳者は別にあるらしく、随つて原作と比べると、翻案は、ほんの荒筋を移したゞけのものになつてゐる（43）」と評している。それではその原訳者とは誰であらうか。

平辰彦は文海の『何桜彼桜銭世中』について、先述した『羅馬盛衰鑑』出版の経緯を念頭に、「河島敬蔵の翻訳した原作の脚本を種本にして小宮山天香がそれを翻案し、宇田川文海に譲つたもの」と推定している。（44）「ロミヨー」「ジュリー」という特徴的な固有名詞の表記から考えても、『悪因縁』の種本も同じく河島敬蔵のものと考えて、まず間違いないであらう。

一九九七年（明治三〇年） 一月三日

『大阪毎日新聞』に移籍した宇田川文海が、この日、タイトルを『悪縁』と変えて、ふたたび『ロミオとジュリエット』の翻案の連載を開始する。この連載は、全五〇回におよび、同年十二月二五日に無事完結している。

一九〇四年（明治三七年） 六月一二日

この日、「チャールス、ラム著／小松武治訳」の『沙翁物語集』が東京の日高有隣堂より刊行された。小松武治なげじ

(号・月陵) は、この年に文科大学を卒業しており、「自序」には、「此書を成すに当りては我が文科大学なる三講師先生の厚意を蒙りたる事一方ならず。即ち夏目先生にはリーア王、オセロロメオ、ジュリエット、御意の儘、冬物語。上田先生にはマクベス、ハムレット、十二夜、暴風雨、威尼斯商人の校閲の労を賜はり、ロイド先生には屢々質疑をただして指導の恵を受けたり」との記述がある。⁽⁴⁶⁾

「自序」に続いては、ラムによる「原序」の翻訳があり、さらに「自序」で名前を挙げられていたアーサー・ロイド Arthur Lloyd による「Charles Lamb」と題した英語序文、上田敏による「沙翁物語集序」、夏目漱石による「子羊物語に題す十句」と続いたあとに、「沙翁物語集目次」を挟んで本文が始まる。収録されているのは、「リーア王物語」、「オセロ物語」、「ロメオ、ジュリエット恋物語」、「マクベス物語」、「ハムレット物語」、「御意の儘物語」、「十二夜物語」、「暴風雨物語」、「威尼斯商人物語」、「冬物語」の一〇篇。同年七月の雑誌『白百合』には、以下のような紹介が掲載されている。

こは、チャールズラムの「シエキスピア物語」より、悲劇五種、喜劇五種の抜いて、之を翻訳せし書なり。訳者は、本誌『白百合』に小説「一刹那」を物せられし小松月陵氏なり。原著者の文、甚だ流麗、筆力自在なれども、古風の英語なれば、その句法常に長く、為に一句即ち一節に及ぶもの多し。同等接続詞又は従属接続詞の煩、到底近頃の英語学生の堪ふところにあらず。然れども、これ寧ろ日本語の特長なれば、訳者は能く之を調和し得たりと云ふべし。沙翁劇の大体を知らんと欲するものは、一読、思ひ半ばに過ぐるものあらん。卷末には、「篇中戯曲解題」、「重要性格一般」、並にラムと沙翁の小伝を附す。⁽⁴⁷⁾

こうした構成に加え、本文も、「尚ほ訳者はさしあたり先づ暢達雅麗なるラムが此著を通読せられん事を望むが故に、翻訳の際は成るべく原意と原語とを辿り、且つ必要の個処には註解を挿むこととなしたり」⁽⁴⁸⁾とあり、かなり教科書的ないしは研究書的なつくりとなっている。「ロメオ、ジュリエット恋物語」から例を引くと、宴の冒頭のキャピュレットの挨拶——ラムの原文では‘Old Capulet bid them welcome, and told them that ladies who had their toes unplugged with corns would dance with them’⁽⁴⁹⁾——を「老キャピュレットは『よくぞふりはへ給ひし。』と謝して、『此処に集へる令嬢達の中にて、未だ肉刺^まを出さぬ人あらば、随意に舞踏し給ひてよ。』と告げ」と訳したうえで、「沙翁の原本にはこゝに She that makes dainty, She, I'll swear hath corns, とあり此句なければ corn を出すこと突然にて興味なし、ラム何故に之れを脱せるか」とのコメントをつけている⁽⁵⁰⁾。

小松はこの後、『白百合』第一巻第一号、第二巻第一号および第二号に、月陵名義でラムの「夏の夜の夢」の翻訳を連載している。この翻訳は、一九〇七年（明治四〇年）に「しつぺい返し」、「終よき皆よし」、「から騒ぎ」、「娼婦馴らし」、「ヴェロナの二紳士」、「間違の喜劇」、「タイモン」、「ペリクリーズ」、「シムベリン」を加えた『沙翁物語十種』として博文館から単行本化されている。こちらは、『沙翁物語集』ほど学術的なつくりにはなっていないが、簡単な「解題一般」が冒頭に置かれている。『英語青年』に掲載された小松の追悼記事には、日高有隣堂の『沙翁物語集』と博文館の『沙翁物語十種』をまとめて、一九一七年（大正六年）に朝日書房よりあらためて『沙翁物語集』として出版した旨の記載があるが、当該書の存在は確認できなかった⁽⁵¹⁾。

一九〇四年（明治三七年）十一月一日

この日、『歌舞伎』第五五号の附録として、『シエークスピア戯曲／真砂座十一月興行「ロメオ、エンド、ジュリエット」全五幕／小山内撫子 口述／鈴木春浦 筆記』が刊行された。これは同月五日からの伊井蓉峰一座の公演の上演台本であり、翌年の四月には京都明治座で、藤間小次郎一座によって再演されている。舞台は明治の日本に置き換えられ、登場人物名は次のようになっている。

エスカラス	飛鳥公爵
モンタギュー	元田伯爵
キャピュレット	狩野伯爵
ロミオ	衆雄
ジュリエット	百合枝
マーキューシオ	楠雄
ベンヴォーリオ	守雄
ティボルト	泰三

台本を口述した小山内撫子とは、言うまでもなく小山内薫である。

この公演の評価は芳しくなく、各紙に酷評されたようで、小山内は、「「ロメオ」劇の摘訳者」として反論を書く

ことになる。⁽⁵³⁾ 京都での再演の評判も惨憺たるもので、「ヘボばかりで荷が重く背負ひ切れず、三日目頃から改竄を加へぐつと端折つて演よくせし為筋を通すだけのものとなり、沙翁といふ名が振舞はしだけに止まりたり」と切り捨てられて⁽⁵⁴⁾いる。とはいえ、こうして初めて『ロミオとジュリエット』が日本の観客の目に触れることとなったのである。

一九〇五年（明治三八年） 一二月一日

この日、小松武治の「夏の夜の夢」を連載した『白百合』に、戸沢姑射^{こや}の翻訳によるバルコニー・シーンが、「ロメオ、エンド、ヂュリエット」として発表された。「第二幕／第二場 カブレット家庭園の場」との記載のあと、場面は次のように説明されている。

時は邸内にて催したる仮装舞踏会終りたる後の夜更、ロメオ外壁を超え庭園内に忍入りヂュリエットが寝室の方を目指して進み来りしが彼方の二階の窓の橙光を見て立停る、同時にヂュリエット彼方の二階の窓に現れ出る（但しロメオが眼には姿は未だ見えず、たゞ橙光のみ見ゆる⁽⁵⁵⁾）

ロメオの台詞は最初の一行がカットされ、「彼方^{むかう}の窓から光明^{ひかり}がさすのは、お、彼窓^{あれ}こそ天の東門、中なるヂュリエットは大日輪」から始まる。その後、バルコニー・シーンが展開され、ヂュリエットが乳母に呼ばれて一旦退場し、ロメオが「お、たのしのねや、嬉しのねや、たゞこれは夜の事なれば、一場の夢と覚めは果てずや、現には余に嬉

し、うらはづかし⁽⁵⁶⁾」と独白するところで終わっている。

一九〇五年（明治三十八年） 二月一六日

『白百合』に掲載された「ロメオ、エンド、ヂュリエット」には、「近刊大日本図書会社発兌「ロメオ、エンド、ヂュリエット」中の一節」との注記がある。⁽⁵⁷⁾ その予告どおり、この日、大日本図書より沙翁全集の第二巻として戸沢姑射訳『ロメオ、エンド、ヂュリエット』が刊行される。この全集は、浅野馮^{ひょうふう}虚との分担でシェイクスピアの戯曲三七篇を網羅する壮大な計画であった。『文芸倶楽部』に、同書の書評が出ている。

是れ戸沢、浅野両文学士の経営に成る「沙翁全集」の第二巻として現はれし者。此脚本が沙翁が其の筆を悲劇に染めし処女作たるは、皆人の知る所なるが、其の処女作にして既に大天才の非凡なる技量を遺憾なく發揮せるは驚くべき哉。戸沢学士の訳筆深切を極め、一句一章も苟もせざるは素より、例の如く巻頭に此の劇の由来を詳述せる、初学者の為に最も喜ぶべき也。只沙翁の作劇は、猶我が近松の浄瑠璃の如く、既に現代の形勢に適合せざるふしなしとせず、従つて今の世の人々が、見て以て荒誕無稽なりと頭らを傾くる所なしとせざれど、苟も西劇を談ぜんとするものが、沙翁の作を研究せざるべからざるは、猶我が国の浄瑠璃を論ぜんとするものが、近松の作を閑却し能はざるに等し。此の広世の詩聖が俤^{おどろ}ばんとするものは、実に先づロメオ・エンド・ヂュリエットを精読して、沙翁が他の悲劇との比較研究を怠るべからず。⁽⁵⁸⁾

戸沢姑射（本名・正保^{まひん}）は、一八七三年（明治六年）「水戸の旧藩士菊池庸氏の二男に」生まれた。兄は小説家の菊池幽芳（本名・清）。「十四才の時同じく水戸の旧藩士戸沢正之氏の養子となり」、一八九二年（明治三五年）第一高等学校に入学、そこで「英人教師 Mason 先生の時間に、沙翁の「オセロ」を読んで非常に感服しまして、坪内さんの「マクベス」を真似るつもりで翻訳」、この翻訳は一八九九年（明治三二年）に雑誌『太陽』に掲載されるが、「大分当時のお偉方からお小言を頂戴」したという。その後文科大学英文科に進み、ラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn の指導を受ける。ハーンからは、「沙翁の評論中に、「君等も是非翻訳して見られよ、但し君等が現在使用して居る談話語で訳し給え」という示唆を受けたという。⁽⁵⁹⁾

浅野馮虚（本名・和三郎）は一八七四年（明治七年）に茨城県稲敷郡河内村の漢方医の子として生まれ、一八八八年（明治二一年）に上京、東京英語学校を経て一八九一年（明治二四年）に第一高等学校に入学、さらに文科大学英文科に進学した。⁽⁶⁰⁾したがって戸沢と浅野は第一高等学校以来の「同学であり、莫逆の友である」。⁽⁶¹⁾

一八九九年（明治三二年）七月、戸沢と浅野は大学を卒業する。戸沢は大学院に進学し、二年間の在籍を経て山口高等学校に赴任する。ところが、

同校は廃止して高等商業学校になることに決したために、現在の教官は悉く現在の生徒が卒業する迄に廃官となることに、そして私は三十八年（一九〇五年）の三月辞去することに決しました。私はこの機会に兼々考えて居た沙翁の翻訳を真剣にやつて見ようと思立ち、当時横須賀の海軍機関学校に居た浅野馮虚に相談しますと、賛成して当時大学と密接の関係を有して居た大日本図書会社と連絡をつけ、同社でも熱望する由で、私が三十

八年の春、帰京すると同時に早速印刷に取掛ろうという迄に進展しました。⁽⁶²⁾

こうして全集第一巻の『ハムレット』（戸沢訳）が、この年の九月に出版されることとなる。⁽⁶³⁾

その後、全集の刊行は、『ロメオ、エンド、ヂュリエット』、第三巻『ヴェニス商人』（浅野訳、一九〇六年（明治三十九年）二月）、第四巻『オセロ』（戸沢訳、同年五月）、第五巻『リア王』（戸沢訳、同年十一月）、第六巻『マッチ、アドー、アバウト、ナッシング（から騒ぎ）』（戸沢訳、一九〇七年（明治四〇年）四月）、第七巻『ジュリアス・シーザー』（戸沢訳、同年八月）、第八巻『御意のまゝ』（浅野訳、一九〇八年（明治四一年）五月）、第九巻『行違物語』（戸沢訳、同年一〇月）、第一〇巻『十二夜』（浅野訳、一九〇九年（明治四二年）十一月）と続くが、戸沢が「腦充血で片耳の聴力を失い」、「爾後一切読むことを止めよ。書くことも止めよ」という医師の命令により「英文学と縁切りに」なってしまう。⁽⁶⁵⁾ 一方、大学卒業後、「海軍機関学校の教授」の職にあった浅野も、一九一六年（大正五年）に「海軍教授を辞して京都府の綾部に去つて大本教の幹部として活動すること」となり、その際に「英文学、殊に沙翁に関する多くの書籍を悉く売払ってしまった」。⁽⁶⁶⁾ こうして、沙翁全集全三七巻の計画は、未完に終わることとなった。

一九〇七年（明治四〇年）九月一日

この日、『新小説』第二期第一二巻第九巻が発行された。この雑誌は、春陽堂が「出版界の新氣運に乘じ、博文館の「文芸倶楽部」に対抗しようと、休刊中の「新小説」再刊を計画、編集を幸田露伴に依頼して、明治二十九年七月に」刊行を再開したものであり、同巻は田山花袋の「蒲団」を掲載して「文壇の視聽を集めた」。⁽⁶⁷⁾ そこに、伊原

青々園が「日本の「ロメオとジュリエット」というエッセイを寄稿し、『ロミオとジュリエット』と鶴屋南北作『心謎解色絲』の類似を指摘している⁽⁶⁸⁾。

のちに『心謎解色絲』が『ロミオとジュリエット』と「偶然に暗合した」可能性を否定し、「断じてさうではなく、南北が何等かの機会によつて沙翁劇の筋を聞いたので、其れを自分の作に翻案したのだらうと思ひます」と主張することになる伊原であるが、ここでは「吾が文化時代に沙翁の作から翻案したとは減多に信じられぬ」と述べ、次のように結んでいる。

然しながら、既に元禄の昔、近松の「釈迦如来誕生会」が沙翁の「ベニスの商人」と同じ材源から来た事は、拙著「風雲集」に掲げた通りである。よし沙翁の「ロメオ」そのものを翻案せずとも、同じ伝説が東西に流れて、一方は沙翁の「ロメオ」となり、一方は南北が此の作となつたのかも知れぬ⁽⁷⁰⁾

ここで伊原が言及している『風雲集』とは、一九〇〇年(明治三十三年)に出版された、島村抱月による「雪の巻」、後藤宙外による「月の巻」と、伊原による「花の巻」の合巻本である。一八九六年(明治二十九年)五月付の「近松と沙翁との同事異文」と題されたエッセイで、伊原は、人肉一ポンドという着想が「もとは印度より起こりて、一方に於ては、波斯、埃及、及び土耳古を経て欧羅巴に伝はり、其処にて沙翁の筆に上り、他方に於ては、支那を通じて我が邦に入り、此処にて近松が作となりぬ、蓋し一奇なりと謂ふべきなり」と述べている⁽⁷¹⁾。

一九一〇年（明治四三年）一月一日

この日刊行の『新小説』第二期第一五年第一号巻頭に、坪内逍遙訳の『ロミオとジュリエット』が掲載されている。坪内は、「緒辞」において「本篇は沙翁^{はんげん}作中^{しやおうさちゆう}にても最も^{もつと}広く世^よに知られたるもの、一なれば、今更^{いまさら}梗概^{けいがい}を掲^かぐるにも及^{およ}ぶまじと思^{おも}へど、本訳文^{ほんやくぶん}との連絡^{れんらく}を明かにせんため、一二の要点^{えうてん}を語るべし⁽⁷²⁾」と述べて第三幕までのあらすじを紹介したうえで、第四幕第一场以降を抄録している（第四幕の第二場、第四場、第五場は梗概のみ）。同誌には、命絶えたロミオの肩を抱いて嘆くジュリエットを描いた岡田三郎助による口絵も掲載されている。

一九一〇年（明治四三年）九月二三日

『新小説』でその一部が先行発表された坪内逍遙訳『ロミオとジュリエット』の完全版が、早稲田大学出版部から刊行される。『新小説』掲載のものと比較すると、訳にかなり手が加えられているのがわかる。またティボルトの表記が、これまでの『ロミオとジュリエット』に共通していた「タイボルト」から「チツバルト」に改められている。⁽⁷³⁾

一九一〇年（明治四三年）十一月二三日

この日、菅野^{すがの}徳助と奈倉次郎による青年英文学叢書の第一八篇として、『ロメオとジュリエット』が三省堂書店より出版された。青年英文学叢書は、一九〇三年（明治三六年）一二月の『金色王』から一九一一年（明治四四年）九月の『アリババ物語』まで全三二篇が刊行された。シェイクスピア関連では、ほかに『ヴェニス商人』（第四篇、一九〇七年（明治四〇年）一月）、『ハムレット』（第一〇篇、同年六月）、『オセロ』（第一六篇、一九〇九年（明治四二年）一月）が

ある。いずれもラム版に基づくものである。

その「叢書序」には、刊行の目的が次のように謳われている。

英語を学ぶに当り、文法字義を明かにし、所謂難句集に見る如き短文を攻究するの要あるは云ふまでもなしと雖も、亦可成多く一篇を成せる名家の著を読み、英文に対する趣味を養ひ、不知不識其の豊富なる語類成句に習熟することを怠るべからず。前者は専ら学課として教師の指導に待つべきも、後者は学生諸君自ら講学の余暇を利用して之を心掛くべきなり。著者等は親しく学生諸子に接し、教場以外独習の助けとなるべきもの、要求をしれり、是れ本叢書刊行の企ある所以にして、其冊子の小なるも諸子が携帯の便を計りたればなり。⁽⁷⁴⁾

つまり、この叢書は、独学用の語学教科書として刊行されたものであり、その内容は、原文と翻訳と註釈から構成されている。

菅野徳助は、一八七〇年（明治三年）五月に「宮城県石巻に生れ小学を卒へて仙台の呉服店の小僧となりしが」、一八九二年（明治二五年）の夏に「志を立て、上京し」、国民英学会、東京英語専修学校で英語を学んだあと、一九〇二年（明治三五年）に渡米。イリノイ州のウエズレイアン大学 Wesleyan University およびウェスト・ヴァージニア州のベサニー大学 Bethany College で英文学を学んだのち、一九〇六年（明治三九年）に帰国、早稲田大学教授となった。⁽⁷⁵⁾ アメリカからの帰途、「数ヶ月英国に滞在」し、「エーヴォン河の畔に詩聖の墓に詣ふで、倫敦にてウォーラー一座の演じたるオセロ劇を観、更に新たなる inspiration を得たる事」を契機に、原文・翻訳・註釈からなる『悲

劇オセロ』をまとめ、一九〇九年に出版している⁽⁷⁶⁾。同じ年に出版された青年英文学叢書のラム版に基づく『オセロ』には、「尚進んで沙翁の原作を知らんとする諸君は本叢書訳註者の一人菅野徳助著東京玄黄社発行『対訳評註、悲劇オセロ』に就て研究せらるべし」との言葉が添えられている⁽⁷⁷⁾。

奈倉次郎は、「明治五年八月七日静岡県田方郡錦田村に」生まれ、一八九〇年（明治三年）に上京、金城学校英語専科（旧・三田英学校）で学んだ。立教学校の教師などを経て、一九〇〇年（明治三十三年）に文部省英語教員検定試験に合格、一九〇八年（明治四十一年）からは二五年にわたって山口高等商業学校の教授を務めた⁽⁷⁸⁾。

おわりに

以上が、明治時代における「活字になった『ロミオとジュリエット』」の基本データである。網羅的であることに努めたが、なお遺漏があるかもしれない。これらを概観すると、次の三点を指摘することができるだろう。

『ロミオとジュリエット』といえは、いわゆる「バルコニー・シーン」が有名であるが、明治の人々の心をとらえたのもやはりこの場面であった。日本における『ロミオとジュリエット』は、ファニー・レイノー嬢とW・ベニー氏によるバルコニー・シーンの上演——もともとこれは、在留外国人を対象としたもので、日本人の目に触れることはなかっただろうが——とともに始まり、事情はそれぞれに異なるものの、「欧州奇聞花月情話」、『万国名所図絵』、「仇多にし」、『悪因縁』は、いずれもバルコニー・シーンまでを描いて中絶している。まるであたかもそれで事足りりとしているようにも思われる。これは全くの推測に過ぎないが、藤田茂吉の横槍が入った「欧州奇聞花月

情話」にしても、もしかしたら佐藤蔵太郎は、それでもなんとかバルコニー・シーンまでは描きたかったのではないだろうか。

こうした傾向を踏まえたときに際立つのが、坪内逍遙の特異性である。戸沢姑射の『ロメオ、エンド、ヂュリエット』が、雑誌にバルコニー・シーンを掲載して宣伝するという、非常にわかりやすい販売戦略を採用しているのに対し、坪内は、単行本を刊行する前の雑誌における一部先行公開に、あえて第四幕以降を選んでいる。その選択は、初期の『ロミオとジュリエット』受容がいわばバルコニー・シーンだけで事足りていたことに対する、アンチテーゼのようにも思われる。「今更梗概を掲ぐるにも及ぶまじ」と言いながらも第三幕までのあらすじを紹介する坪内の態度の背後には、作品を理解するためにはその全体像が欠かせないとする信念がうかがえる。

第三に、こうした坪内の態度と関連して、明治という新しい時代を迎えておよそ二〇年を境に、受容のモードが変化しているということが指摘できるだろう。それまでの受容が「紹介」に重きを置いているのに対し、この頃から「英文学研究」が制度化され、いわば本格的な受容が始まる。その嚆矢が、ともに一八八六年（明治一九年）に出版された『春情浮世の夢』であり、*Tales from Shakespeare*である。さらに世紀をまたぐと、不完全な形とはいえ、日本の観客のための『ロミオとジュリエット』が登場するとともに、新しい教育制度のもとで英語を学んだ人々による『ロミオとジュリエット』が出版されるようになる。仙台の呉服店奉公を振り出しに、国民英学会、東京英語専修学校で学び、アメリカ留学を経て早稲田大学教授に収まった菅野徳助などは、まさにこうした新しい教育制度における立身出世物語の典型的な人物であると言えるのではないだろうか。

* 本論は、第五六回シェイクスピア学会（二〇一七年一〇月七日および八日、近畿大学東大阪キャンパス）のセミナー「英學史に於けるシェイクスピア（沙翁）」における口頭発表に、加筆・修正を施したものである。コーディネーターの村上健氏、ゲスト・スピーカーの川戸道昭氏、メンバーの鵜澤文子氏、内丸公平氏、高橋百合子氏、増田珠子氏、森祐希子氏からは、貴重な示唆をいただいた。記して感謝したい。

注

- (1) *The Japan Times' Overland Mail: A Summary of Commercial, Political, and General News, Published for Dispatch by each Mail Steamer to Europe*, Vol. 7, No. 105, 1869, p. 145.
- (2) *Ibid.*, p. 146.
- (3) 『喜楽の友』については、近藤弘幸「日本最初の『ロミオとジュリエット』——雑誌『喜楽の友』と小栗貞雄」（『人文研究要』第七九号、二〇一四年）四七—四九頁、その発行人である竹村正路については近藤弘幸「三河武士と『ロミオとジュリエット』——竹村正路伝」（『英学論考』第四三号、二〇一四年）五九—八六頁を参照せよ。
- (4) 『遊戯雑談 喜楽の友』第一号、一八七九年、一二頁。
- (5) 近藤「日本最初の『ロミオとジュリエット』」、六〇—六七頁。
- (6) 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』（明治文学研究第五卷）春秋社、一九六二年、二八二頁。
- (7) 『函右日報』一八八四年二月八日、第三—四面。最後の「シェーキスピアノ」は「シェーキスピアノ」の誤植であると思われる。
- (8) 前掲書、第四面。
- (9) 佐藤蔵太郎については、柳田泉『政治小説研究（上）』（明治文学研究第八卷）春秋社、一九六七年、二〇八—二六頁を参照せよ。
- (10) 『函右日報』一八八四年二月二六日、第三面。
- (11) 柳田『明治初期翻訳文学の研究』、二七五頁。

- (12) 近藤「日本最初の『ロミオとジュリエット』」、五四―五九頁。
- (13) 『郵便報知新聞』一八八五年四月七日、第三面。
- (14) 『郵便報知新聞』一八八四年二月一日、第二―三面。同紙ではルビは左に打たれている。
- (15) 柳田『明治初期翻訳文学の研究』、二六八―七二頁。
- (16) 青木育志「青木嵩山堂の出版活動」(吉川登(編)『近代大阪の出版』創元社、二〇一〇年) 六九頁。
- (17) 前掲書、七三―七四頁。
- (18) 土居通豫「世界旅行 万国名所図絵序」(青木恒三郎(編)『世界旅行 万国名所図絵』(全七巻) 青木嵩山堂、一八八六年―一八八七年)、第一巻(頁数なし)。
- (19) 前掲書、第三巻二二頁。
- (20) 前掲書、第三巻二三―三〇頁。
- (21) 前掲書、第三巻三〇―三四頁。
- (22) 前掲書、第三巻二七頁、二九頁および三一頁。
- (23) 高市慶雄「『羅馬盛衰鑑』『春情浮世之夢』著者河島敬蔵氏のこと」(『明治文化研究』第四巻第四号、一九二八年) 五一―五二頁。
- (24) 竹村覚『日本英学發達史』研究社、一九三三年、二二七―二八頁。竹村は、『ジュリアス・シーザルの劇』の連載を、二月一日から四月一日までの三一回としているが、誤り。小宮山桂介については、柳田泉『政治小説研究(下)』(明治文学研究第一〇巻) 春秋社、一九六八年、一八五―九七頁を参照せよ。
- (25) 高市 前掲書、五二頁。
- (26) 前掲書、五二―五三頁。立教大学蔵の「自明治二十七年九月／至明治二十八年六月／私立立教学校規則」の「校員」に「英書訳読」の担当者として河島の名前がある。
- (27) 川戸道昭『明治のシェイクスピア』(明治のシェイクスピア《総集編》第一巻) 大空社、二〇〇四年、二七二頁。
- (28) 井上蘇吉(編)『総目録』敬業社、一八九四年、扉。
- (29) 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓(編)『英語教育史資料』(全五巻) 東京法令出版、一九八〇年、第五巻六一―六二頁。

- (30) 高市慶雄「仇結奇の赤繩 西洋娘節用解題」(吉野作造(編)『明治文化全集』全二四卷、日本評論社、一九二七—一九二九年、第一三卷四二頁。
- (31) 前掲書、第一三卷四〇頁。
- (32) 春烟小史(訳)『哀別奇遇 誠之鏡』品田太吉、一八八七年、一頁。同書の奥付には「赤司新三郎」の名があるが、これは木下と同一人物である。「一時養家に入籍した為めで、明治二十三年には再び木下姓に還つた」(高市 前掲書、四二頁)。
- (33) 『日本之女学』第一号、一八八七年、二頁。
- (34) 前掲書、三頁。
- (35) 近代女性文化史研究会(編)『近代婦人雑誌目次総覧』(全一五卷) 大空社、一九八五年—一九八六年、第一卷(頁数なし)。
- (36) 『日本之女学』第四号、一八八七年、一八頁。
- (37) 『日本之女学』第六号、一八八八年、七三—七四頁。
- (38) 前掲書、七六頁。
- (39) 『日本之女学』第一号、一八八八年、三六—三七頁。
- (40) 『大阪朝日新聞』一八八九年六月一四日、第三面。
- (41) 『大阪朝日新聞』一八八九年七月九日、第三面。
- (42) 宇田川文海および彼のシェイクスピア翻案作品全般については、近藤弘幸「宇田川文海とシェイクスピア」(『英学論考』第四一号、二〇一二年)三一—五〇頁を参照せよ。『悪因縁』および次に述べる『悪縁』については、近藤弘幸「『お家物』か『人情的小説』か、それが問題だ——宇田川文海と『ロミオとジュリエット』」(中央大学人文科学研究所(編)『愛の技法——クイア・リーディングとは何か』、中央大学出版部、二〇一三年)三三—五三頁を参照せよ。
- (43) 坪内逍遙「日本に於ける沙翁研究、翻訳、翻案及び上演の略史」(坪内逍遙(訳)『マクベス』早稲田大学出版部、一九一六年)附録一二頁。
- (44) 平辰彦「『ヴェニス商人』と『何桜彼桜銭世中』——その台本と上演をめぐる」(『英学史研究』第二七号、一九九四年)一七四—七五頁。

- (45) 「小松武治氏逝く」『英語青年』第一一巻第一号、一九六五年）五六頁。
- (46) チャールス・ラム『沙翁物語集』小松武治（訳）、日高有隣堂、一九〇四年、三頁。
- (47) 『白百合』第一巻第六号、一九〇四年、三〇頁。
- (48) ラム 前掲書、二頁。
- (49) Charles and Mary Lamb, *Tales from Shakespeare*, Penguin, 2007, p.211.
- (50) ラム 前掲書、七四頁。
- (51) 「小松武治氏逝く」、五六頁。
- (52) 『歌舞伎』第五六号（一九〇五年）の口絵に三枚の舞台写真が掲載されている。
- (53) 「ロメオ」劇の摘訳者「劇評家諸先生に申上候」（『歌舞伎』第五六号、一九〇四年）六二―六八頁。
- (54) 山田桂華「京の五月興行」（『歌舞伎』第六二号、一九〇五年）六四頁。
- (55) 戸沢姑射「ロメオ、エンド、ヂュリエット」（『白百合』第三巻第二号、一九〇五年）、八七頁。
- (56) 前掲書、九〇頁。
- (57) 前掲書、九〇頁。
- (58) 『文芸倶楽部』第二二巻第三号、一九〇六年、三一四頁。
- (59) 戸沢姑射「沙翁全集」の思い出咄（上）（『英語青年』第九六巻第七号、一九五〇年）三〇五頁。
- (60) 昭和女子大学近代文学研究室「近代文学研究叢書」全七六巻＋別巻、光葉会（第一九巻まで）↓昭和女子大学（第二〇巻以降）、一九五六―二〇〇一年、第四一巻三七八―三八〇頁。
- (61) 山宮允「戸沢先生」（『英語青年』第九六巻第七号、一九五〇年）三〇五頁。
- (62) 戸沢姑射「沙翁全集」の思い出咄（下）（『英語青年』第九六巻第八号、一九五〇年）三四四頁。
- (63) この時は、劇中劇の部分が「此一断片は近刊浅野馮虚戸沢姑射共訳沙翁全集第一篇『ハムレット』中の一節なり」との言葉を添えて、『明星』に掲載されている。戸沢姑射「ハムレット劇中の劇」（『明星』巳年第九号、一九〇五年）二八―三〇頁。『白百合』には書評が掲載されているが、「謹厳忠実一字一句も深く意をとめられた」翻訳であることを認めつつ、「天才の精神を体现するを以て文芸翻訳の第一義と思ふ吾人は猶慊らぬふしが多い」と厳しく評価するものとなっている。

乃帆流「沙翁全集第一巻ハムレットを読む」(『白百合』第三巻第一号、一九〇五年) 八四頁。

- (64) この時も、『ロメオ、エンド、ヂュリエット』のときと同じく、その一部(第一幕第一場)が『白百合』に掲載されているが、近刊云々という言葉はない。浅野馮虚「ヴェニス商人」(『白百合』第三巻第四号、一九〇六年) 二二四—一八頁。

- (65) 戸沢 前掲書、三四四頁。

- (66) 「浅野和三郎氏逝く」(『英語青年』第九六巻第一号、一九三七年) 三九三頁。戸沢および浅野について詳しくは、ほかに海江田進「沙翁全集の試み——戸沢正保・浅野和三郎の業績」(『東京外国語大学論集』第一九号、一九六九年) 一一三—一三三頁および松本健一『神の毘——浅野和三郎、近代知性の悲劇』新潮社、一九八九年、八九—九八頁を参照せよ。

- (67) 杉本邦子『明治の文芸雑誌——その軌跡を辿る』明治書院、一九九九年、九一頁。

- (68) 『新小説』第二期第二二年第九巻号(一九〇七年)には、「本欄」として、田山花袋「蒲団」(全七八頁)、兒玉花外「鷺」(全四頁)、中谷無涯「蟹乙女」(全四〇頁)、小川未明「酒肆」(全一二頁)、高崎春月「琵琶湖が宿」(全一六頁)、鹽井雨江「意気の友」(全一八頁)の六編が、この順番に独立した頁数を振られて掲載されており、そのあとに、「思潮」「雑録」「家庭」「譚叢」「芸苑」「社会」「流行」「我観録」「時文」「葉書文」「懸賞吟咏」「時報」の各コーナーが一頁から始まる通し番号で収録されている。伊原の「日本の「ロメオとジュリエット」」は、その八八—九二頁(「芸苑」の最初)に掲載されている。

- (69) 伊原青々園「日本に於ける沙翁劇」(『早稲田文学』第二期第二二五号、一九一六年) 一四三頁。「心謎解色絲」と「ロミオとジュリエット」の関係については、近藤「日本最初の『ロミオとジュリエット』」、四三—四七頁を参照せよ。

- (70) 伊原「日本の「ロメオとジュリエット」」、九二頁。

- (71) 伊原青々園「花の巻」(島村抱月・後藤宙外・伊原青々園『風雲集』春陽堂、一九〇〇年) 五九頁。佐々木隆「書誌から見た「近松門左衛門とシェイクスピア」比較研究」(『武蔵野学院大学大学院研究紀要』第四輯、二〇一一年) 三一、三四—三五頁も参照せよ。

- (72) 坪内逍遙(訳)「ロミオとジュリエット」(『新小説』第二期第一五年第一号、一九一〇年) 一頁。

- (73) 日本で最初の『ロミオとジュリエット』である『喜楽の友』掲載の「ロミオとジュリエットの話」が「タイボルト」という表記を採用して以来、本論で挙げたほとんどの『ロミオとジュリエット』において、「タイボルト」ないしそれに準ず

る表記が採られている。重要な例外は、『郵便報知新聞』掲載の「落花の夕暮」における「チバルト」。

- (74) 菅野徳助・奈倉次郎「叢書序」(菅野徳助・奈倉次郎(訳註)『ロメオとジュリエット』(青年英文学叢書)三省堂書店、一九一〇年)、一頁。

- (75) 「菅野徳助氏逝く」(『英語青年』第三二卷第九号、一九一五年)二九三頁。

- (76) 菅野徳助「緒言」(菅野徳助(訳註)『悲劇オセロ』玄黄社、一九〇九年)二頁。

- (77) 菅野徳助・奈倉次郎「本編緒言」(菅野徳助・奈倉次郎(訳註)『オセロ』(青年英文学叢書)三省堂書店、一九〇九年)頁数なし。

- (78) 「奈倉次郎氏逝く」(『英語青年』第九四卷第二号、一九四七年)六三頁。

